



第12回 寒地開発に関する国際シンポジウム ISCORD 2019開催のご案内

〈会 期〉2019年6月17日～19日
 〈開催地〉フィンランド オウル市
 〈会 場〉ホテル ラザレッティ コンgress センター
 (Hotel Lasaretti Congress Center)
 〈テーマ〉寒地における持続可能な資源管理
 (Sustainable Resources Management in Cold Regions)

〈ISCORD 2019公式ウェブサイト〉
<https://www.ril.fi/en/events/iscord-2019.html>

ISCORD 2019は国際寒地開発研究協会(IACORDS)、フィンランド土木学会(Finland Association of Civil Engineers: RIL)及びオウル大学(University of OULU)との共同開催で実施されます。現在、公式ウェブサイトで論文概要を募集中です。なお、ISCORD 2019では展示(有料)、スポンサーシップによる広報も企画されています。詳細、および提出要項等は上記公式ウェブサイト(英語)をご参照ください。

- ◆論文概要提出締切: 2018年10月 1日(月) ◆概要審査結果通知: 2018年11月14日(水)
- ◆英語本論文提出締切: 2019年 2月 4日(月) ◆本論文審査結果通知: 2019年 3月20日(水)
- ◆論文発表者登録締切: 2019年 4月30日(火)

※口頭発表は本論文提出者に限ります。ポスター発表は論文概要の提出のみでも可。本論文の提出は任意。

ISCORD2019 トピック

- ・凍土と永久凍土
- ・港湾と海運
- ・建築設計
- ・舗装性能
- ・建設技術
- ・道路管理
- ・構造物と基礎崩壊
- ・都市圏の積雪管理
- ・雪氷を用いた構造物建設
- ・石油と天然ガス
- ・ロジスティクス
- ・凍土環境におけるパイプライン・インフラ
- ・環境への配慮
- ・再生可能資源を含むエネルギー問題
- ・社会文化的課題
- ・政策策定
- ・教育
- ・地質工学、地球情報学
- ・ライフラインと地震工学
- ・水道及び汚水処理システム
- ・寒地における水資源管理
- ・持続可能な技術
- ・独立/オフグリッド型発電
- ・スマート&デジタル・ソリューション
- ・北極圏特有の課題
- ・先進的工学ソリューション

お問合せ:

[国 内] 北海道大学工学部、環境社会工学科内、IACORDS事務局 E-mail: iscord@eng.hokudai.ac.jp
 [現地窓口](英語対応のみ)ISCORD2019事務局(RIL) E-mail: Elina.Rantakallio



第34回 寒地技術シンポジウムのお知らせ

第34回寒地技術シンポジウムを札幌市(札幌コンベンションセンター)で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、参加をお待ちしております。詳しくはホームページ<http://www.decnet.or.jp/>をご覧ください。

◆開催日: 2018年12月5日(水)～12月7日(金)

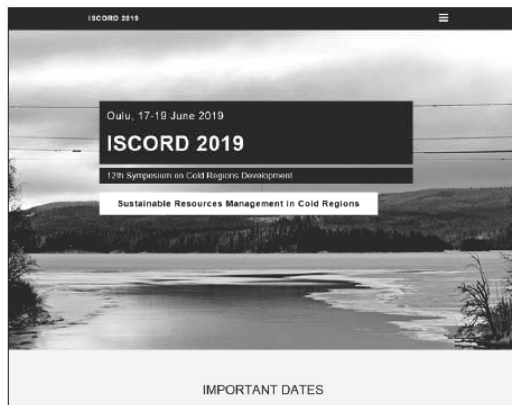
◆会 場: 札幌コンベンションセンター(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

◆内 容:

- ★論文(査読・報告論文共通で口頭発表を行います)
 - (1) 査読論文→登録・査読用概要提出………受付終了しました
 - (2) 報告論文→登録・概要提出……9/20(木)まで受付延長中です(お問い合わせください)
- ★技術展示→お申込み………お問い合わせください
- ★講演論文集(CD-ROM)・概要集(冊子)お申込み(有料)……11/9(金)

編集後記

今年の夏は、天候の良い日が少なかった印象ですが、みなさん夏は楽しめましたでしょうか? 私自身は、夏らしいことをあまりできずに過ごしたので、消化不良のような状態です。短い夏、もっと楽しめたかったです。数少ない夏の思い出としては、学生時代の友人と数年ぶりに集まったことでしょうか。集合場所が倶知安町だったので、澄んだ空気に包まれ、気持ちも身体もリフレッシュでき清々しい気分になりました。そんな倶知安町で、珍しいレンズ雲に遭遇。天候がくずれる前兆らしいですが、初めて目にできたので、それも一つの夏の思い出になりました。(M.K)



ISCORD 2019
公式ウェブサイト



オウル大学



オウル市の街並み

プログラム
公開は
10月上旬頃の
予定です

お問合せ:
 (一社)北海道開発技術センター
 「寒地技術シンポジウム」担当係
 (担当: 向井・新森)
 TEL: 011-738-3363
 FAX: 011-738-1889



dec monthly

2018.8.1 vol.395 デックマンスリー



- Monthly Topic (マンズリートピック)
世界水準のサイクリング環境構築を目指して
北海道のサイクルツーリズム推進フォーラム
- dec Report (デックリポート)
函館新道「花いっぱい活動」植栽活動報告

dec Interview >>> 有限会社阿寒観光ハイヤー 取締役社長 松岡 篤寛 氏

インバウンド増加やLCC就航など観光のさらなる展開が期待される一方、人口減少が著しい釧路地方。25歳で阿寒町のタクシー会社の経営者となって以来、この地ならではの新たなタクシー事業の可能性を追求している松岡篤寛さんにうかがいました。

横浜の大学を卒業後、Uターンしてご実家の阿寒ハイヤーに勤務。その後、町内の別のタクシー会社の経営者になられて現在13年目です。タクシー経営は大変ですか。

阿寒湖畔で1964年創業の観光タクシーを営む家の長男に生まれ、小さいときから家業を継ぐのだという周囲からの刷り込みがありました(笑)。それとの葛藤があって、違う道を歩きたいと思っていましたが、やっぱり阿寒が好きで戻ってきました。

父の会社は観光ガイドタクシーですが、私が経営者となった会社は主に地域住民の足となる一般的なタクシー会社でした。町は人口減少が進み、利用者は減少の一途ですから、私は事業を多角化して経営を安定させようと観光タクシーを事業に加え、6年前からは阿寒バスの路線代替として乗合タクシー事業を受託。現在、3本柱で経営しています。

観光はインバウンドに対応できるように早い時期から社内の態勢を強化しました。当初、外国人のお客様は少なかったものの、ある時期から倍々のペースで増えて町場の利用減少を補い、均衡がと

れる状態になりました。主力は冬場で、香港やシンガポールなどアジアの富裕層のお客様を案内することが多いです。わかさぎ釣りにお連れして喜ばれるなど、リピーターも増えつつあります。語学は得意ではありませんが、スマホの翻訳アプリを使い、心が通い合うように努めれば問題なくご案内できます。

乗合タクシー事業は、旧炭鉱町の布伏内という集落と阿寒町市街を結ぶ路線について、ジャンボタクシーで住民の足を支えています。釧路市の補助金による運行で収益性は高くありませんが、定期収入を得られるので経営基盤の強化になります。

現在、従業員数はドライバー8人含め9人。事業の比率は、観光タクシー4、町場の一般利用4、乗合タクシー2の割合です。今後は収益性の高い観光部門をもっと伸ばしていきたいところです。

そこで将来を見越して注目されたのがサイクルツーリズム事業ですね。「サイクル・サポート・タクシー」の取り組みが期待されます。

もともと自転車は大好きですが、近年の観光客の動向を考えると新しい分野に挑戦することにしました。国内観光客は高齢化の進展とともに動きが鈍くなっていますし、旅の楽しみ方も変わってきました。ゴルフならゴルフと目的をしっかりと絞って、それに合う地域や滞在環境を求める人が増えているのです。以前の団体旅行とは違い、個別の目的に合わせた受け入れ環境をつくらなければ、国内、

サイクルツーリズムの受け入れ環境を整え、事業多角化によりタクシー経営の安定を図ることが目標。サイクル・サポート・タクシーの取り組みを開始します。

dec Interview

まつおか あつひろ

1980年釧路市阿寒町生まれ。2003年、横浜商科大学卒業後、阿寒町に戻り、家業である阿寒ハイヤーに勤務。05年、阿寒観光ハイヤーを買収し、経営者に。釧路市地域公共交通活性化協議会委員、「くしろロコサイクルプロジェクト」代表を務める。趣味は登山、スケート、自転車、カメラ、ドローンと幅広い。

インバウンドを問わず、観光客を取り込むことは難しくなっています。

そこでターゲットを絞り、他の会社がやっていないことをしようと準備してきたのがサイクル・サポート・タクシーです。サイクリング・ツアーに同行して、サイクリストの荷物や補給食、修理工具などツアーに必要なものを運び、トラブルに合ったサイクリストや自転車に乗せたり、道案内したりするのがサービス内容で、特に宿泊を伴う長距離ツアーではサポート・カーの必要性は高くなります。

現在、準備しているのは、自転車8台をルーフに積載できる9人乗りジャンボタクシー。レンタル用にクロスバイク4台も購入しました。今年9月から試験運用を始め、モニターツアーなどで腕ならしをする予定です。

今年4月には地域全体のサイクリスト受け入れ環境の充実を目指して「くしろココサイクルプロジェクト」というグループを結成。どのような取り組みなのでしょう。

釧路市と鶴居村など近隣の地域で、宿泊施設、レストラン、自転車店など民間7社ほどと道の駅、観光協会に呼びかけ、サイクリストに快適な環境をつくるために連携しようと活動を始めました。私が代表を務めています。実は、仕掛け人の一人はdecの原文宏さんで、アドバイザーをお願いしています。

活動目的の一つは、釧路市中心部から阿寒町をつなぐサイクリングロード(道道835号釧路阿寒自転車道)の有効活用。雄別鉄道の廃線跡地を整備した約25kmの道で、とてもいいコースですが、整備されて40年余り経つのに、場所がわかりづらいこともあって市民に忘れ去られています。私は5年ほど前から気に入ってよく走るようになり、もっと多くの人に利用してもらうためにはどうしたらいいのか、策を練るようになりました。

このコースの終点(阿寒町)近くに昭和レトロな元旅館の建物があって、

ここを仲間と一緒に改装し、昨年7月、「ゲストハウス・コケッコ」をオープンさせました。25人ほどが宿泊できる畳部屋のドミトリーで、派手な宣伝はしていないのですが、英語併記のサイトを通じて旅慣れた欧米からのお客さんなど外国人の利用が増えています。サイクリストにもぜひ利用してほしいと思います。

この他、プロジェクトでは、新釧路川(釧路湿原南端の岩保木から釧路市街を通って太平洋へ注ぐ一級河川)の堤防がサイクリングコースとして可能かどうか調査する予定です。オフロードを含み、釧路湿原の景観を楽しめるコースになるのではと期待しています。

グループをつくったことで、今までふわっと思い描いていたことが具体的に動き出し、地元サイクリストなど協力者を受け入れる受け皿も整えられたと思います。一緒に作り上げていく感じがいいですね。

シーニックバイウェイ北海道の「釧路湿原・阿寒・摩周ルート」の活動では、阿寒湖エリアの代表をされていますね。

13年ほど前、阿寒・摩周間の国道241号沿いで、地域の有志が42kmにわたる「阿寒摩周クリーン・ウォーク」(清掃活動)を行いました。その後2年めの大会でシーニック候補ルートに選定。この大会は5年続きました。私もその活動の初期メンバーだったのですが、本業が忙しくなり、指定ルートになってからも活動からは遠ざかっていたのです。でも、2年前に阿寒湖エリアの役員の方から「代表になってほしい」と声がかかり、活動に復帰しました。

阿寒湖エリアの活動では、「滝口」という地元で自慢の紅葉の名所に着目し、昨秋は周辺の清掃を行いました。今年も9月下旬に駐車帯の清掃活動を行い、将来的にはベンチや案内看板の整備を行っていきたくと思っています。場所は温泉街から数キロ離れた国道沿いのビューポイント・パーキング近

くで、滝見橋という橋があり、その下流は透明度の高い、素晴らしい清流です。釣りにも向いていますが、紅葉の時期は眺めが最高です。まだ観光スポットとしての知名度は低いので、たくさんの人に立ち寄っていただけるように環境を整えたいですね。

さまざまな活動を意欲的に取り組まれています。これからの目標は。

いろいろと挑戦していますが、失敗も多いです(笑)。交通事業者としては、末永く地域の足を守っていくことが目標。そのためには新しい収益を確保していかなければなりません。そういう意味で、自転車に大きな可能性を感じています。外から来たサイクリストも釧路は自転車に乗る環境として非常に良いと評価してくれているし、もっと町場でも郊外でも自転車に乗る人が増えたらいいなと思います。そして、地域の子どもたちが自然豊かな環境のなかで自転車やマウンテンバイクを日常的に楽しみ、それが成長してからの地域への郷土愛や誇りにつながればと願っています。

私自身、仕事の悩みでモヤモヤしたときに、とても自転車に乗りたくなります。長い坂を登っているときは苦しくて他のことが考えられないのですが、降り切ると脳が洗濯されたようで気持ちがいい。自転車の魅力をどんどん伝えていきたいと思っています。



始動を待つサイクル・サポート用の車両(ジャンボタクシー)



「滝口」周辺の清掃活動



世界水準のサイクリング環境構築を目指して

北海道の サイクルツーリズム 推進フォーラム

2017年5月の自転車活用推進法施行を受け、北海道では産学官民連携による自転車観光推進の気運が高まっています。本フォーラムでは道内5つのモデルルートの取り組みを中心に最新動向や課題が示されました。

2018年5月29日/ホテルさっぽろ芸文館
主催:北海道開発局・北海道

私は『サイクルスポーツ』など自転車専門誌の編集長の経験をもとに自転車観光のコンサルタント活動を行っています。自転車観光を推進する上で、大事なことはスポーツサイクルという自転車の特徴を理解することです。実用的自転車と異なる点は多く、例えば自立スタンドが付いていないので駐輪にはラックが必要で、タイヤに空気を入れるのに空気圧を調整できる仏式バルブ付き空気入れが必要です。駐輪、保管、運搬など自転車に対応したサービスとシャワーなどサイクリストのニーズに合わせた環境整備が求められます。

自転車活用推進法では自転車による「観光客来訪の促進その他の地域活性化の支援」などが基本方針に掲げられ、「世界に誇るサイクリング環境の創出」に向けて2020年度までに全国で40のモデルルート設定が目標となっています。また、講ずべき措置として①官民連携による先進的なサ

イクリング環境の整備、②広域的サイクリングロードの整備、③ナショナルサイクルルートの創設、④サイクルトレイン等の実施拡大、⑤交通結節点等におけるサイクリスト受入サービスの充実、が挙がっています。①は北海道のモデル5ルート、②は約千kmの四国1周サイクリングの先例があり、③の最有力候補はしまなみ街道(愛媛・広島)でしょう。⑤ではJR土浦駅直結の拠点施設りんりんスクエア土浦が好例です。

近年は道の駅のサイクリング拠点化も進んでいます。マップなどの情報提供をはじめ、シャワー設備やサイクルスタンド、空気入れや工具などの貸し出しサービス、レンタサイクルなど充実を図る施設が増えています。サイクリスト対象のウェブ調査でニーズを見ると、首位はマップ。以下、案内看板、安価な宿、トラブル対応、ドリンク、荷物搬送などの順。私は霞ヶ浦、琵琶湖、浜名湖を対象に自転車旅のインフ

ラについて約20項目の観点で達成度を調べましたが、列車やクルーズとの連携を含め、かなり環境は整ってきています。

環境整備で肝心なのはルート設定です。エリア全体に網をかけるのではなく、きっちりと線として指定し、それを情報発信することが大切です。国内でもサポートカーや自転車積載可能な貸切バス、電動アシスト自転車用の充電ネットワークなど新しい試みが広がりつつあり、高性能電動アシストスポーツ車が続々と登場していることにも注目です。

北海道では自転車観光のインフラ整備やイベント開催などが急ピッチで展開され、大変期待しています。今春発足した(一社)北海道サイクルツーリズム推進協会によるガイド養成講座や北海道サイクリング協会主催の「北海道1周ライド」などイベントも多様化しています。今後一層、大事になるのが情報発信。市販のガイドブック刊行が一つの目標だと思います。

基
週
間
講
義
自
転
車
観
光
の
受
け
入
れ
態
勢
『サイクリング観光客のニーズに合致した取り組み』

NPO法人日本風景街道コミュニティサイクルツーリズム研究会 顧問

宮内忍氏

北海道のサイクルツーリズム推進に向けた先駆的な取組と今後の展望について

パネルディスカッションでは「北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会」(2017年2月設置事務局:北海道開発局・北海道)で設定された道内5つのモデルルートの関係者が集い、現状や課題について語り合いました。その後、今年4月施行の北海道自転車条例について道総合政策部地域創生局の担当者から話題提供が行われました。ここではディスカッションでの主要な発言をご紹介します。

パネルディスカッション



コーディネーター

・萩原 亨 氏
北海道大学大学院工学研究院 教授

パネリスト

・宮内 忍 氏
NPO法人日本風景街道コミュニティ
サイクルツーリズム研究委員会 顧問

・杉川 毅 氏
きた北海道ルート:
宗谷シーニックバイウェイ事務局長/
稚内印刷機代表取締役

・村橋 広基 氏
石狩川流域圏ルート:
美唄市 観光振興課

・和田 貴義 氏
阿寒・摩周・釧路湿原ルート:
有限会社泰都 (HOTEL TAITO)
専務取締役

・爲廣 正彦 氏
トカプチ400: (一社) 交通環境
まちづくりセンター代表理事

・鷲見 悠太 氏
富良野・占冠ルート:
富良野市 商工観光課

■5つのモデルルートの成り立ち・特色は

萩原氏 「北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会」の委員長としてモデルルートの設定、試行について中間とりまとめを行ったところ。今回は5ルート間の連携やPRを図る機会でもあります。それぞれの取り組みについてご紹介ください。

◆杉川氏【きた北海道ルート】

宗谷シーニックバイウェイ事務局長として活動してきましたが、運営計画の見直しを機に「環境と観光」の融合を目指し、利尻礼文サロベツ国立公園の自然を満喫できるプログラムを探そうと「スイス・モビリティ」に着目しました。観光カリスマの山田桂一郎氏の助言で本場にも視察に出かけて検討した結果、自転車専用道がある利尻島をフィールドにサイクルアクティビティ振興を進めることにしました。島は1周55kmで初・中級のサイクリストに最適で、定着したサイクル・イベントもあります。PRを兼ね、島1周のコースに全国から名前を公募し「利尻・彩くるロード」と決まりました。

◆村橋氏【石狩川流域圏ルート】

2012年に台湾自転車協会役員の方々からサイクリングツアーに美唄市を訪れて以来、交流が深まり、市でもインバウンド獲得に向けた自転車観光の環境整備を進めています。2016年度には70、35、15kmとヒルクライムのコースを設定。その一部が石狩川流域圏ルートと重なっています。路面表示や看板サインの設置を進め、昨年からガイド養成講座も実施。今春、国の地方創生の補助を活用して開業したのがサイクリスト対応の宿泊施設「ゆ〜りん館別館」です。昨秋、市内を走る「びばいカントリーライド」を開催し、美唄の食や景観を楽しんでいただきました。今秋も開催予定です。

◆和田氏【阿寒・摩周・釧路湿原ルート】

鶴居村で民間ホテルを経営していますが、昨年度、経産省地域産業資源活用事業計画の認定を受けてサイクル事業に乗り出しました。くしろサイクリング協会の一員でもあり、「サイクリストに優しい宿」をコンセプトに、低コストできめ細やかな設備充実に取り組んでいます。室内外のサイクル・

ラックや自転車の手入れのための各種用具やスペース、コインランドリーなども整え、レンタルも行っています。緊急時の回収サービスや送迎サービスも実施し、地元原料を生かしたプリンも補給食として好評です。

◆為廣氏【トカプチ400】 6年前にシーニックバイウェイ北海道のかかわりで、二宮尊徳の報徳思想をゆかりとした豊頃町と静岡県掛川市の地域間交流が始まりました。これが自転車への取り組みの発端で、静岡のサイクリストが十勝にツアーに訪れるなどイベントによるサイクル交流事業を展開してきました。地域の経済的循環を促進する観点で取り組みを進めています。その一つが帯広駅前で行っている「とくちやレンタサイクル」という事業者間連携による事業です。電動アシスト付自転車を含め多様な自転車をそろえ、昨年の利用者は一昨年の4倍に増加しています。

◆鷲見氏【富良野・占冠ルート】

富良野市で広域連携事業を担当しており、富良野美瑛の「田園休暇」というコンセプト確立と「移動さえも楽しむ」という提案で地域ブランド向上を目指しています。2014年度から富良野美瑛広域観光推進協議会のサイクル部会で10のルートを検討。その一つが富良野・占冠ルートです。案内サインの整備やリーフレットなどの情報発信の他、「美瑛センチュリーライド」、「かみふらの十勝岳ヒルクライム」、「富良野・美瑛チャレンジサイクリング」などのイベントを実施し、住民の意識醸成を図ってきました。民間と行政、サイクリストをつなぐように協議会が支援しながら整備を進める方針です。

萩原氏 宮内さんはこれまで北海道各地で実走されていますが、アドバイスを。
宮内氏 きた北海道ルートは景観的に日本最高レベル。サイクリストは北海道で走るなら宗谷岬を目指したいという心境になりますが、このムーブメントをうまく利用すればいいですね。美唄は石狩川流域圏ルートの基幹ルートから派生するルートですが、台湾との交流をインバウンド誘致につなげ、イベントで地域の人やお店をうまく巻き込んでいます。阿寒・摩周・釧路湿原ルートは日本ではまだ珍しいバイクホテルが強い。ぜひ「バイクホテル」という言葉でアピールしてほしい。トカプチ400はレンタル利用が急増し、電動アシスト付自転車も導入しているとのこと。稼働率についてデータをとり、今後の参考にしてください。富良野美瑛は環境整備がかなり進み、大雪が見える景観も素晴らしい。さらなる高見を目指してほしいと思います。

■ルートそれぞれの今後の目標・展望は

萩原氏 では、今後の展望や目標について一言ずつ、お願いします。

杉川氏 旭川から宗谷岬までの「TEPPEN-RIDE(てっぺんライド)」が好評です。レンタカー、バス、JR、カヌーなど自転車との多彩な組み合わせで宗谷岬を目指すようにできればと思います。

村橋氏 石狩川流域圏ルートの基幹ルート240kmのうち、美唄市のルートと重なっているのは16km。基幹ルートからの誘導のために、さらに情報発信などに工夫していきます。

和田氏 レンタルバイクの台数を増やし、ルート開拓やガイド・ツアーを

充実させて海外からの集客を目指します。傷害保険完備やタクシー業者との連携も必要だと思っています。

為廣氏 手ぶらでロング・ライドを楽しんで着いたら荷物も到着している、という荷物運搬や自転車乗り捨て可能なサービスを地元事業者との連携で模索していきます。

鷲見氏 イベントを通じてモデルコースの周知を国内外に広く図り、ガイド養成など受け入れ環境の充実に励みます。サイクリストの交流を促す事業を引き続き展開します。

■北海道の課題はインフラ整備と情報発信

萩原氏 最後に、宮内さんから北海道の現状についてコメントをお願いします。

宮内氏 景観のダイナミックさにおいて北海道は間違いなく日本のトップクラスのエリア。問題はインフラ整備と情報発信です。例えば、サイクリストのサポート拠点は道の駅だけでは難しく、できればコンビニと組みたいですね。情報発信については、道内5ルートともに日本を代表するナショナルルートへの選定を目指すべきでしょう。でなければ、外国人向けの主要観光ガイドブックに掲載されません。

札幌駅などの観光案内所でマップなどサイクリング情報がどれぐらい入手できるか試しましたが、驚くほどわずかでした。実際には全道でたくさんのマップやパンフレットが作成されています。北海道ではガイドサービスの水準も高く、数も多い。レンタサイクルの取り組みも活発化しています。しかし、そうしたサイクリング情報を一元的に、また多言語で入手することは難しいのが現状。情報発信への取り組みが急務です。

文責:dec

北海道命名150年の年に「はこだて花かいどう」が今年で15年目

函館新道「花いっぱい活動」植栽活動報告

dec主任研究員 中村幸治

2018年6月9日(土)、函館の玄関口である国道5号函館新道インターチェンジ付近。開会式会場には、約1,100名の参加者が集う圧巻の光景が広がっていました。子どもからお年寄りまで一緒になって道路沿道に花を植え、訪れた方々をおもてなしする取組み。今年で15年目を迎えた「函館新道花いっぱい活動」について、函館花いっぱい道づくりの会代表の折谷久美子さんのお言葉とともにご紹介します。

花を介したおもてなし

国道5号 函館新道における「花いっぱい活動」は、28の構成団体からなる「函館花いっぱい道づくりの会」が中心となり道ゆくドライバーや函館を訪れた国内外の観光客の方々に、「綺麗な花を見て、旅の疲れを癒していただき、喜んでいただきたい」というおもてなしの気持ちで、平成16年度から活動が続けてこられて、今回で15回目を迎えました。

1,100名が集まった開会式

開会式では、函館花いっぱい道づくりの会を代表して、折谷久美子さんが活動当初から今日に至るまでの経緯や現在の想いをたおやかな雰囲気でも語られました。

続いて、国道5号 函館新道等を管理されている函館道路事務所の加納民雄所長から参加者へのお礼とご挨拶。

15周年メモリアル演奏会

さらに今年は、活動15周年記念セレモニーとして、稜北高校吹奏楽部による演奏が行われ、生徒のすがすがしい演奏が開会式に賑わいと清涼感を重ねてくれました。また、参加者には、活動15周年記念の缶バッジが配られ、みんなで胸につけて花植えをする一体感が心地よく、参加者の活動に対する機運を高めることに一役買っています。

ここで、開会あいさつを終えた、函館花いっぱい道づくりの会代表の折谷久美子さんに、これまでの経緯と活動に対する思いを伺うと、にこやかに次のような熱い思いを語って下さいました。

活動初年度の道路沿線は、畑が広がり企業はほとんどありませんでしたが、現在では大型量販店、スーパー、ガソリンスタンド、温泉施設などが建ち並び、交通量も大幅に増えました。函館を訪れた観光客に、きれいな花を見て旅の疲れを癒していただき、また喜んでいただけるよう花いっぱいメンバー一同、おもてなしの気持ちで活動が続けてきました。



開会式会場を埋め尽くす約1,100名の参加者



「函館花いっぱい道づくりの会」代表の折谷久美子さん



活動15周年を記念して制作・配布されたオリジナル缶バッジ

函館花いっぱい道づくりの会の構成団体は、28団体です。本日の参加者は、約1,100名で、そのうち稜北高校から125名、桔梗中学校から165名、亀田中学校から116名と、406人が中高校生の参加というのも大きな特徴といえます。石川町や桔梗町に住んでいる中学生(桔梗中・亀田中)が、稜北高校に進学する生徒が多く、小中学生の頃から花の活動に参加しているため、他地域から入学された花活動になじみのない生徒も、友達同士で声を掛け合って参加してもらえるようになりました。小中高校は、学校ごとに先生がとりまとめてくださっていますが、学校行事としてではなく、あくまでも個人参加というのが嬉しいのです。

さらに、年月を重ねるごとに沿線以外の企業さんの参加も多くなりました。皆さんのご協力があってこそ、きれいな道を維持することができています。地域に密着した活動だからこそ、こうして15年も継続できるのだと思います。これからも、息の長い活動とするために、道路管理者・自治体・企業・NPO・ボランティアの相互協力関係を大切にしていきたいと思っています。

中高生につなぐ地域愛

折谷さんのお言葉にもあったように1,100名の参加者のうち406名が近隣の中高校生の参加。この活動を通じて、彼らが大人になった時、この地や函館市、さらには、北海道全体に愛着を持ってくれること間違いなしです。

花植え終了後は、名物の「焼きそば」に舌鼓を打ち、新たに彩られた沿道の風情を楽しみながら参加者それぞれが帰路につきました。

大切なのは、日常のメンテナンス

花を植えたら活動が終了というわけではありません。むしろ、その後の定期的な維持管理が、秋までの美しい沿道景観を保つために必要不可欠なのです。函館花いっぱい道づくりの会では、毎月1回、植樹枠の雑草取りや花ガラ摘み(咲き終わった花を摘み取る作業)、水やり等を行っています。この活動にも小中学生をはじめ、地域ボランティアの参加者が数多く参加されています。花をめぐる気持ちやおもてなしの心が表情にも表れ、皆さんの笑顔が素敵です。こうして、お盆前や秋の行楽シーズンに向けて、地道ではありますが大切な活動が日々行われていることに参加者の皆さまの地域に対する愛着心を強く感じました。



開会式に華やかさを加えた稜北高校吹奏楽部の演奏



中高生も参加し、植えた花苗の合計は、約8,000株にも

子どもから大人まで一緒にマリーゴールドとペゴニアを植栽